

緑のまきば

1974. 10

小金井緑町教会
小金井市緑町四一六一三三
電話〇四三三八一一七九六一
編集 牧師 山本圭一

真実の死と、生と

山本圭一

教説

このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。(コロサイ3章1)

「上にあるものを求めなさい」何と慰めに満ちた呼びかけであろうか。それは、魂の中で起った奇蹟のようにさえ思われる。

なぜならわれわれのまわりには権力意志が横行し、上のものどころか、徹底的に「下のもの」此岸のものを追い求めてやまないからである。この世俗主義の嵐の中にうめきを経験しない者はいない。そればかりか現代は神を必要としない世界に一見成人したようでありながら、自らが神になることにおいて、一切の後見人を拒否している時代である。まさに神が死んだという場所に、人間という新しい神が、黒々と誕生した時代である。神の存在の問題は、古くより多くの神学者や哲学者が論議を重

ねたような形而上学の問題として現代人には迫ってこない。むしろ「今、この、私にとって」というさし迫った人間実存の課題である。ところが偶像を拒否し続けた人間が、自らを神としたにもかゝらず、神たるべき人間の中に死を究極のものとして認める決断をしなければならぬとは、何と不可解なことであろうか。この重い情感は、死によって人間が限りある者となるばかりか、無限に続く死の中に、「永遠の死」とも言うべき事柄の中に、全く埋もれていくことを表わしている。豊かな文化、生の喜びの中に、どこまでもつきまとう「死の無限さ」を宿しているかぎり、死によっても人間の一切は解決しないのだ。

◆ 「あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから…」

◆ 何と深い事柄に根ざした呼びかけであろうか。死のうちに閉じ込められた人間にとって、これほどの強烈な、生々しいメッセージがかってあったであろうか。この解放を告げる著者は、すでに決定的な死をキリストによって聞いたものであった。

「あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって」「彼と共によみがえらされたのである」(コロサイ2章12)

人は長い旅路を「神は、神は」と探し求めて歩き続けた。しかし、答えのない世界に、この求めは満たさるべくもなかった。ところが、この叫びに終りがきた。「神よ」と呼び求めるように、招かれたのだ。あの古き自己の死と新しい生命が、キリストの十字架と復活と共に訪れた。それはわたしたちの労苦の多い生活のただ中へも「かたりかける」ことばとして訪れた。われわれは、この真理の呼びかけの前に引き出され、これを覚知す

るばかりでなく、「アバ父よ」と祈り始める交わりの中に生きることをゆるされた。聖書の生きたことばは、いつも現実の人間に宣べ伝えられる「宣教の使信」(ケリユグマ)であり、それによって信仰へと召される。

◆ 「そこではキリストが神の右に座しておられる」

◆ 何と畏敬に満ちた世界であろうか。十字架にかゝり甦えり給うた主をわれわれが礼拝するようにとりなされていることは、神の右に座し給うキリストの主権に属する。「われらのため あまつ園に今なおとりなす 主をぞ仰ぐ」(讚美歌三〇七ノ五)

だから教会生活は自分の感情や、便宜によっては永続しない。生ける主が喜ばれるような仕方、神を拜まねばならない。自分の理由を数えあげて礼拝に出席しないものは、救いにあずかった自由を自ら放棄する。何よりも自らの救いの達成のために祈り互いに忍耐深く親切に、しかも妥協しない態度をもって教え、礼拝を全うしたい。われわれの甘さは神に対しても甘さになるからである。